

## ワイルドの批評

——三島由紀夫を手がかりに

鈴木ふさ子

オスカー・ワイルドが三島由紀夫(1925-70)に大きな影を落としていることはよく知られている。三島が自分の目で選んだ最初の本は『サロメ』であり、1950年には「オスカー・ワイルド論」を発表、1960年には『サロメ』の演出、さらには、1970年の自決後に三島自身の遺志で再演された『サロメ』が実質的な追悼公演となるなど、作家としての三島の最初と最後にワイルドが不思議な円環を持って現れる。このため、ワイルドと三島は『サロメ』の影響、あるいは同性愛や気質の類似といった人物間の比較を中心に論じられることが多いが、ここでは、三島が「芸術家としての批評家」、「嘘の衰退」を高く評価していたことに着目したい。

三島は、批評の問題になると、「芸術家としての批評家」を引き合いに出し、この作品に批評の本質があると語った。また、ワイルドも三島も「嘘の衰退」中の「芸術が人生を模倣するのではなく、人生が芸術を模倣する」という批評理論をその人生において具現したように思われる。

三島は評伝「ペン、鉛筆と毒薬」についても言及している。三島が最も注目したのは、この作品の中で繰り返される「美が犯罪の動機になる」という主題であった。美意識が犯罪のエネルギになる神話をワイルドが信じたと解釈した三島は、そこにワイルドの「美の判断力がもっと直接に鋭利に凶暴に人間の肉体を切り苛む場面を夢見る」(三島 27. 295)という欲望を見出し、「ウェンライトの犯罪を、決定された人間存在に対する新たな批評による変革と、そこに見出される自由との主題に造りかえている」(三島 27. 297)と指摘している。三島は、ウェンライトの生涯がワイルドという批評家の目を通して別の意味を持たされ、別の芸術作品に昇華したと考え、その意味で「芸術家としての批評家」の批評家は芸術家よりも創造の能力があるという批評理論の正当性を確信したのではないだろうか。

ワイルドは、「ペン、鉛筆と毒薬」が発表されたのと同じ1889年1月に「嘘の衰退」、その翌年には「芸術家としての批評家」と、批評を立て続けに発表して

いる。1889年という年に、ワイルドは雑誌の編集長の座を辞し、文筆家として身を立てようとしていたが、新たな人生を〈批評〉から始めたことは注目に値する。三島が、「ペン、鉛筆と毒薬」はワイルドが垂涎万丈の妬ましきで書いたと断定しているように、ウェンライトは当時のワイルドの理想を集約した存在であった。「芸術家としての批評家」で提示した批評家の資質——美しい環境に育ち、時代や流派に惑わされることなく美の本質を見極める非常に高い鑑識眼を備え、善悪ではなく美のみを価値判断の基準とし、美を制作するのではなく、全体的な印象として感じ取ることを一義としている——をウェンライトは体現しているからである。三島は、美意識が犯罪の理由になるというウェンライトの義妹殺人のエピソードにワイルドのサディスティックな欲望を見出したが、そこには、むしろ批評家として新しい一歩を踏み出したワイルドの自らが唱える唯美主義の正当性を示そうという意欲の方が強く見られるように思われる。三島がワイルドの作品から嗅ぎ取った「美が犯罪になることを夢見る」という欲望とは、「芸術家としての批評家」に見られる批評家は芸術家自身気がつかなかったものを芸術作品から炙り出してみせるという論のごとく、実は三島自身が内包していた欲望の表れだったのではないだろうか。この強い欲望が後年の『金閣寺』などに顕著に現れる〈滅亡の美学〉となって実を結ぶことは、すでに磯田光一などが指摘している。

ワイルドを形容する際に〈ダンディ〉という言葉がしばしば用いられるが、ワイルドはウェンライトをダンディとみなしていた(Wilde 995)。ダンディとは、万事に対して世間一般とは逆のことを好むつむじ曲がりの性質の持ち主であり、都会志向で、子孫を持たず、人間の本能に逆らった人工性、不毛性を特徴とし、やがて朽ちていく自己を芸術化した人たちとも言える。ステファン・キャロウェイは、ワイルドたち世紀末のダンディを高い美意識によって物事を感じ取る〈感覚のダンディ〉と定義し、ワイルドが批評家の資質として最も大切なものとした〈芸術的気質〉と関連づけ、彼らが自己の芸術化に向かう傾向があることを指摘している。この〈芸術的気質〉を拠り所としている点においてワイルドの考える批評家とダンディは接点を持っていると言えよう。

ワイルドたち19世紀末の芸術家にダンディとして影響を与えたボードレールは「現代生活の画家」の中で提示した「ダンディズムとは一個の落日である」(Baudelaire 712)という有名な定義において、沈む前の太陽の、物悲しさと憂愁に満ちた、それでいて人を惹きつけずにはおかない輝きに、美意識に従って生きることが身の破滅となることを予感しながらも、自分に拘り続けるダンディの人生を象徴した。破滅の予感という点において、ウェンライトは初期のエッセイに

において誘惑に抗しきれず、大英博物館から像を盗み、死刑宣告を受ける自分を牢獄で空想していたというが、彼は美の充足のために罪を犯し、破滅の運命を辿ることを予感していた。さらに、フランスにとどまっていれば、安全だったのに、自分を愛してもいない女を追いかけてイギリスに戻り、偽造為替の罪で逮捕される。自らの衝動によって自分の身を危険にさらすことを知りながら、そうせずにはいられないのである。その不条理で破滅的な行為こそダンディの生き方を象徴している。三島が「ペン、鉛筆と毒薬」を「ワイルド自身の後年の運命を暗示する点で興味をつきないメモワール」(三島 27. 294) と評しているように、ワイルドはウェンライトの破滅的な生き様を辿るように人生の終焉を迎えた。まさに、「人生が芸術を模倣する」という一節を体現したと言える。

三島も、この一節に暗示的なものを感じていたのだろうか。若者が映画を見て接吻の仕方を覚えるという指摘やハワイの天然色の景色はハワイの広告写真の模倣だという指摘から、映画館にいてもハワイの青い空の下にいても、三島がワイルドのこの一節の有効性を見出していることがわかる。「少年の最初の読書の選択は、少なくとも文学書の選択は、決して偶然といふやうなものではない。自分の未来を自分の手で鷲掴みにしてしまふのだ」(三島 33. 481) と書いた三島は、自分自身で最初に選んだ『サロメ』が自らの人生の預言書であることを感じていたのではないだろうか。三島は最初に小説を書いた動機について自分をメチャクチャにしてしまうような欲望から逃れたかったため(三島 29. 179) と述べている。三島は自分の嗜好と格闘し、『潮騒』などの古典主義的な作品を書き、結婚し、健全な作家として生きていこうと努力したが、晩年にはそれが不可能であることを悟ったのではなかったか。

三島は自分の本質が 10 代の頃のロマンティズムにあり、そこに回帰することが作家としての誠実さなのだ(三島 40. 744) 自決の一週間前に語っている。三島にとっての 10 代への回帰がすべて『サロメ』への回帰であったと言うつもりはないが、10 代の頃に最初に手にとった文学作品『サロメ』を選び取った直感の正しさこそ三島が常に感じていたことであり、いつかはサロメの世界を実現するのではないかと予感していた三島にとって「人生が芸術を模倣する」というワイルドの批評は強い説得力を持っていたにちがいない。

三島は、「批評といふものが本質的に自己を選択する能力だと考へると、批評こそ創造だと言ひ出したワイルドは、彼自身の運命を創造した人間のやうに思はれる」(三島 27. 285) と語っているが、三島もまた自らの運命を芸術を通して予感し、創造していったワイルドと同じ批評家であり、ワイルドの批評は、ワイル

ドとは「肉慾で結びついている」と、時代も国籍も異なる作家との強固な絆を語って憚らなかつた三島の人生をも物語っていると言えるのではないだろうか。

## [注]

本稿における引用は、以下のテキストによるものとし、本文中に作者名と引用頁(三島の作品からの引用は作者名、巻数、引用頁)を記した。

Wilde Oscar. *The Complete Works of Oscar Wilde*. 1948. ed. J. B. Foreman. London: Collins, 1983.

Baudelaire, Charles. *Œuvres, Complètes I*, ed. Claude Pichois, Paris: Gallimard, 1975.  
三島由紀夫。『決定版三島由紀夫全集』第 1～42 巻、新潮社、2000～2006 年。

## [参考文献]

Calloway, Stephen. "Wilde and Dandyism and Senses," *The Cambridge Companion to Oscar Wilde*, ed. Peter Raby, Cambridge: Cambridge UP, 1997.

Danson, Lawrence. *Wilde's Intentions: The Artist in his Criticism*. 1997. Oxford: Clarendon, 1998.

Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. 1987. London: Penguin, 1997.

Jackson, Holbrook. *The Eighteen Nineties: A Review of Art and Ideas at the Close of the Nineteenth Century*. 1913. London: Grant Richards, 1922.

生田耕作。『ダンディズム——栄光と悲惨』中公文庫、1999 年。

磯田光一。『殉教の美学』冬樹社、1971 年。

ケンプ、ロジェ。『ダンディ——ある男たちの美学』講談社現代叢書、1989 年。

佐伯彰一。『評伝 三島由紀夫』新潮社、1978 年。

先田進。「『禁色』と『ドリアン・グレイの肖像』、『日本文化研究』(1)、1988 年 12 月。

堀江珠喜。『薔薇のサディズム——ワイルドと三島由紀夫』英潮社、1997 年。